

「まちに生き、市民とつくる、参画交流型の美術館」、「子どもたちとともに、成長する美術館」—これらのミッション・ステイトメントが示すように、当館は現代美術に特化した美術館として、鑑賞者とともに同時代の表現に立ち会い、ともに価値を生み出していくプログラムを提案してきた。それは、従来の美術館と鑑賞者の関係を問い、美術館活動における教育普及の可能性を探る試みでもあった。

2007年度からの当館の教育普及事業の特徴は、美術館から鑑賞者へという一方向性を見直し、美術館と鑑賞者が相互に刺激しあい成長するプログラムを開発してきたことにある。本稿では、2009年度までの活動から、作品と鑑賞者の新たな関係を探る3本のプログラムをとりあげ、美術館教育の可能性を考察する。

鑑賞者とともに成長する 「ミュージアム・クルーズ」

美術館教育の基礎となるのは「鑑賞」である。様々な出会いが生まれる美術館という場において、その出会いを鑑賞体験へと導き、鑑賞者個人の世界観の拡大へと展開させるべく、鑑賞プログラムは構成されている。

小学4年生を対象としたグループ鑑賞プログラム「ミュージアム・クルーズ」^{*1}は、この考え方を象徴するプログラムのひとつであるが、最大の特徴は、子どもたちの鑑賞体験の一端を担うボランティア・スタッフ「クルーズ・クルー」の存在であろう。彼らは解説者ではなく、子どもたちの感動や発見を受け止めながら作品と向き合う鑑賞者であり、鑑賞体験を重ねることで、彼らもまた自身の世界観を拡大していく。つまり、このプログラムは子どもたちとクルー

ズ・クルーの両者を対象にした鑑賞プログラムなのである。

2006年度の開始以来、250回を超えるミュージアム・クルーズが実施され、約18000人の子どもたちが美術館を訪れた。その経験の集積は、円滑な運営のためのシステムを整えたが、一方で、「鑑賞」をプログラムすることの難しさを浮かび上がらせた。そもそも鑑賞という行為は、作品を媒介とした個人的な体験であり、プログラムはあくまでも鑑賞体験を活性化する触媒にすぎない。日々子どもたちと向き合い、鑑賞体験を共有するクルーズ・クルーはそのことを誰よりも経験的に知っている。

子どもたちにとって一回限りの鑑賞体験を、その大切さを知るボランティア・スタッフとともに丁寧に作り上げる。継続するプログラムは、そこに関わる鑑賞者の豊かな経験が還元され、蓄積されることで、更なる深化を遂げるだろう。美術館の成長は、鑑賞者の成長によってはじめて可能となるのだ。

創造の現場に立ち会う 「金沢若者夢チャレンジ・アートプログラム」

社会教育施設である美術館が芸術活動を通して現代社会に対峙する一つの実験として、2007年、当館は「金沢若者夢チャレンジ・アートプログラム」^{*2}を立ち上げた。ストックホルム近代美術館の「ゾーン・モデルナ」を参照しつつ、若者の人間形成への貢献を目的として、当館独自に構成している長期プロジェクト型展覧会である。

このプログラムに関わる若者は、作家に最も近い位置で創造の現場に立ち会い、作品と鑑賞者をつなぎ、様々な出会いを通して成長して

いく。美術館は、表現活動のプロセスがそのまま提出されるワークショップの場となり、そこに予定調和の物語は用意されていない。

同時代の表現を、ワーク・イン・プロGRESSの形式で展示し、参加者とともに作り上げるこのプログラムの存在が、美術館活動における「教育普及」の可能性を拡げるきっかけとなったのは自然な流れであった。異分野とのコラボレーション、キュレーターとエデュケーターの協働、地域社会との連携、ボランティアとの密な交流など、美術館の内外で新たな関係性が生まれたことにより、美術館の新陳代謝が上がり、活性化につながった。

また、「調査研究」、「収集保存」、「企画展示」、「教育普及」といった美術館の機能が連動し、一体化する状況を作り出したこと、それが開かれた場で起こったことは、スタッフの意識をも変えたのではないだろうか。

評価が定まっていない同時代の作品を「研究」し、「展示」する現代美術館において、鑑賞者とその現場に様々な形で立ち会い、考え、批評することこそ「教育普及」の原点であり、こうした場を作り出すことが現代美術館の役割といえるだろう。

人を介して作品を未来につなぐ 「アートモール・スクール・プロジェクト」

2009年度に開催した、開館5周年記念展「愛についての100の物語」^{*3}は、“オープン・ダイアログ”（開かれた対話）をテーマとし、既存の美術の枠組を越えた様々な表現が出会う舞台となった。さらに、鑑賞者の介在により無数の物語が紡ぎ出され、作品世界は無限の広がりを見せた。

*1. 本書pp.97-98「ミュージアム・クルーズ」の項参照

*2. 本書pp.76-77

「金沢若者夢チャレンジ・アートプログラム」の項参照

*3. 本書pp.62-65「愛についての100の物語」の項参照

*4. 本書pp.100-101

「一般を対象とした鑑賞教育活動」の項参照

2007-2009年度の教育普及事業

この展覧会では、鑑賞者との多様な関係性を作品の構成要素とする表現活動を多く紹介しており、こうした作品を対象とした鑑賞プログラム「アートモール・スクール・プロジェクト」⁴を立ち上げた。作品ごとに結成された5組のボランティア・チームが同時多発的に活動し、作品・作家と来場者をつなぐ役割を果たした。

例えば、奥田扇久による《栽培からはじめる音楽》では、ヒョウタンを栽培し、楽器に加工して演奏するメンバー「HOP KANAZAWA 21」が作品の要となり、パトリック・トゥットフオコ《パイサークル》では「ドライブ・リーダー」が一般来場者のドライブ体験をサポートすることで、作品が本来あるべき風景をつくり出した。また、アーティスト・ユニット「みかん電鉄」による《みかん電鉄まるびい線開通》では、「社員」となったボランティア・スタッフが来場者を巻き込み、電車ごっこスタイルで鑑賞を深めるワークショップとパフォーマンスを行った。

現代美術において、時に、鑑賞者は同時代の表現を目撃するだけでなく、ともに作り上げる存在となりうる。こうした状況を調査し、評価して未来につなげていくためには、美術館が実験場となり、鑑賞者を育てていく必要があるだろう。

開館から5年、「まちに生き、市民とつくる、参画交流型の美術館」、「子どもたちとともに、成長する美術館」を目指して蒔いた種は、まだ発芽したばかりである。今、その生長を見守っていた鑑賞者が、その芽とともに育てる存在となりつつある。その成果を知るのは遠い将来になるだろうが、私たちは長期的な視野を持ちつつ、地道な研究と実践を重ねるほかはない。無限の可能性をもつ未来に向かって、鑑賞者と協働で「いま」を積み上げていくことが、現代美術館の教育普及活動といえるだろう。

(平林恵／キュレーター・2007-2009年度教育普及統括)

The mission statement of the 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa declares that it will “create a participation-oriented museum along with citizens and revitalize the community,” and “grow in spirit along with the children.” As a museum that specializes in contemporary art, it has presented programs in which the museum and the visitors act together in experiencing contemporary artistic expression and creating value. We have examined the conventional relationship between the museum and the viewer and explored ways of expanding the possibilities of education and outreach in the museum’s activities.

Since 2007, we have taken a skeptical attitude toward top-down educational programs, delivered by the museum to viewers in a unilateral fashion, and tried to develop programs that allow interaction between the museum and the viewer and encourage growth on both sides. In this article, I would like to examine the possibilities of museum education by discussing three programs presented through 2009 that led to discoveries of new relationships between artworks and viewers.

The Museum Cruise: Growing with Viewers

The foundation of museum education is art appreciation. A variety of encounters between viewers and artworks occur on the site of the museum, and art appreciation programs are

structured to lead visitors from encounters to contemplative experiences that broaden the ways that each individual look at the world.

Our group art appreciation program for fourth graders, the “Museum Cruise,” symbolizes this way of thinking. Of special importance to this program is the role of the “Cruise Crew,” the volunteer staff that shares the art appreciation experience with the children. Rather than giving interpretations or explanations, the crew members look at the artworks with the children and elicit and listen to their responses and opinions. Their understanding of the world continues to expand as they gain experience in contemplating art, so this art appreciation program is as beneficial to the members of the “Cruise Crew” as it is to the children.

Since the program was started in 2006, it has been held more than 250 times and introduced approximately 18000 children to the museum. The experience accumulated during this time has enabled us to form an effective system for smooth operation of the program. At the same time, this experience has made us realize how difficult it is to make art appreciation into an educational program. The act of viewing art is an individual experience mediated by the work, so this program can only be a catalyst that enriches the viewing experience. Because the “Cruise Crew” interacts with children day after day and shares the art appreciation experience with them, its members are more aware of this situation than anyone.

For the children, this is a once-in-a-lifetime

2007–2009 Educational Programs